山梨医大紀要　第17巻，80～83（2000）

母性看護学実習における学生の不安と自己受容性に関する研究

神林玲子，菅野美香，西脇美春

母性看護学実習前後において，学生の抱いている不安と自己受容性との関係及びそれらの変化を明らかにすることにより，今後の学習指導の指針とすることを目的に，Spielberger のSTAIと宮沢のSAIの2種類の質問紙を用いて調査を実施した。その結果，STAIの状態不安についてのみ実習前後で有意差がみられた。また，STAIとSAIの関係から，不安が高い場合には自己受容性が低いという傾向がみられた。自己受容性は実習前に比べて，実習後には徐々に高まりつつある状態を示す結果が得られた。

キーワード：STAI，不安，SAI，自己受容性，母性看護学実習

Ⅰ　はじめに

看護学生にとって，臨床実習は対象者と直接関わり看護を展開することで，理論と実践を結ぶことのできる重要な場である。同時に学生がさまざまな関わりを通し，ひとりの人間として成長することのできる貴重な時間でもある。

しかし，学生たちは初めての実習経験であり，かなりの不安と緊張感を抱いた状態で臨床実習に臨んでいる[1]。適度な緊張感は学習効果を高める方向に作用するといわれている[2]。それに対し，過度の不安や緊張は学習に対する意欲だけでなく，自己に対する自信をも低下させてしまうことにつながるといえる。

これまで看護学生の不安・ストレスや，自尊感情に関する調査は行われてきているが，学生が自己をあるがままに受け容れるという「自己受容性」に関する調査報告はほとんどなされていない。梶田[3]は「自分自身に対して否定的な感情を持っている人は，他者に対しても否定的感情を持っており，自分自身への感情が肯定的な方向に変化していくと，他者への態度も肯定的になっていく」と述べている。学生が適度な緊張感，前向きな気持ちのあらわれとしての不安感を持った状態で臨床実習に臨むことができれば，自己受容性を高め，臨床実習をより有意義なものにできるのではないかと考えた。

そこで今回，母性看護学実習前後において，学生の抱いている不安と自己受容性との関係及びそれらの変化を明らかにすることにより，今後の学習指導の指針とすることを目的に調査を実施した。

Ⅱ　研究方法

1）母性看護学実習の概要

母性看護学実習は，褥婦実習1週間，新生児実習1週間，産婦と妊婦の実習1週間の合計3週間3単位の構成になっている。褥婦と新生児の実習では1名の学生がそれぞれの実習場で，正常経過をたどると予測される対象を1名ずつ受け持ち，看護過程の展開を行った。産婦と妊婦の実習は見学を中心とし，一部援助を実施した。

2）調査対象

Y医科大学医学部看護学科3年次実習生10名（平成12年1月10日から同1月28日）と4年次実習生26名（平成12年5月8日から同7月7日）の合計36名を調査対象とした。

3）調査方法

母性看護学実習開始前に行われるオリエンテーション時と3週間の実習終了時に質問紙を用いて行った。調査に用いた質問紙は次の2種類である。

(a) 不安の測定

水口ら[4]によって日本語版に翻訳されたSpielbergerのState-Trait Anxiety Inventory（以下STAIと略す）を用いた。STAIは測定時点での不安の強さを示す状態不安と，性格特性としての不安になりやすさを示す特性不安を分けて評価することができる。

判定方法は20項目の質問ごとに4段階の尺度（状態不安尺度：「全く違う」，「いくらか」，「まあそうだ」，「その通りだ」），（特性不安尺度：「ほとんどない」，「たまに」，「しばしば」，「しょっちゅう」）のうちいずれかの回答を選択させる。回答区分を得点化（1～4点）し，状態不安尺度，特性不安尺度の各々において合計得点が高いほど不安が高いことを示す。

(b) 自己受容性の測定

自己受容性を明らかにするために宮沢秀次（1987）[5]が作成した自己受容性測定スケール（Self-Acceptance Inventory：以下SAIと略す）を用いた。自己受容性は以下の4側面を持つ。①自己理解（自己の諸側面をありのままに受け容れ，自己に冷静な目を向け，自己認識していること），②自己承認（現在の自己を否定せず，自己をそのまま承認して受け容れること），③自己価値（自己を無価値な存在としてみたり，無意味感を持つことがなく，自己の人間的な価値を疑わないこと），④自

山梨医科大学医学部看護学科

己信頼（現在および将来の自己の可能性を信頼し，人生や物事に対する対処能力に自信を持つこと）。SAIは，自己理解8項目，自己承認6項目，自己価値6項目，自己信頼7項目の4側面27項目からなっている。また，MMPI（Minnesota Multiple Personality Inventory, Hathaway McKinley, 1943）のLieスケールの中から5項目が修正して加えられている。評価方法は「あてはまる」，「どちらかといえばあてはまる」，「どちらかといえばあてはまらない」，「あてはまらない」の4段階評定でいずれかを選択させる。回答区分を得点化（4～1点）し4側面各々で合計得点が高いほど自己受容性が高いことを意味する。

4）分析方法

統計ソフトSPSSを用いて集計し，Pearsonの相関係数及び平均値の差の t 検定による分析を行った。仮説「$\rho = 0$」及び「$\mu 1 = \mu 2$」の検定の有意水準は5％とした。

Ⅲ　結果

1）STAI（状態不安・特性不安尺度）を使い，学生の実習前後の不安について平均値で比較し，その結果を表1に示した。状態不安の平均値は，実習前58.08±9.99(S.D.)，実習後42.00±7.80（S.D.）で有意差が認められる（t = 10.329）。また，特性不安について実習前後での有意差は認められない。

2）SAIを使い，学生の実習前後の自己受容性について平均値で比較し，その結果を表2に示した。自己理解と自己信頼で実習前より実習後に平均値がやや低くなり，自己承認と自己価値では実習前より実習後に平均値がやや高くなっているが，自己受容性の4側面とも実習前後での有意差は認められない。

3）STAIの状態不安と特性不安における相関をみた。実習前 r =0.554，実習後 r =0.481と両者とも中程度の正の相関がみられる。

4）自己受容性の4側面間における相関について，実習前後の結果を表3に示した。実習前では，各側面間で中程度から強い正の相関がみられ，中でも，自己承認と自己価値の間に強い相関がみられる（r=0.718）。実習後では，実習前と同様に自己承認と自己価値の間に強い相関がみられる（r = 0.752）が，その他の各側面間においては弱い正の相関がみられる。

5）状態不安・特性不安と自己受容性の4側面における相関について，その結果を表4に示した。状態不安と自己受容性の4側面との間には弱い負の相関がみられる。実習前後で相関係数を比較すると，状態不安と自己信頼のみやや小さくなっているのに対し，他の3側面との間ではやや大きくなっている。特性不安と自己受容性の4側面との間は中程度の負の相関である。実習前後では4側面ともその程度がやや低くなっている。

表1　状態不安と特性不安（mean±S.D.）

n = 36

	実習前	実習後	
状態不安	58.08±9.99	42.00±7.80	*
特性不安	49.86±7.70	48.74±8.39	

* $\rho < 0.05$

表3　自己受容性の側面間相関

n = 36

		自己理解	自己承認	自己価値	自己信頼
実習前	自己理解		0.630 *	0.460 *	0.531 *
	自己承認			0.718 *	0.512 *
	自己価値				0.395 *
	自己信頼				
実習後	自己理解		0.392 *	0.312	0.471 *
	自己承認			0.752 *	0.389 *
	自己価値				0.267
	自己信頼				

* $\rho < 0.05$

Ⅳ　考察

STAIとSAIの2種類の質問紙を用いて，実習前後における学生の不安と自己受容性について比較検討した。STAIによる状態不安と特性不安のうち実習前後の有意差がみられたのは状態不安だけである。Spielberger[6]によるSTAIの評価段階基準と比較すると，状態不安に関しては，実習前の平均値58.08±9.99は非常に高い状態を示す段階（51以上）であり，実習後の平均値42.00±7.80は高い状態を示す段階（42～50）にある。一方，特性不安に関しては，実習前の平均値49.86±7.70，実習後の平均値48.74±8.39ともに高い状態を示す段階（45～54）にある。学生は性格特性として不安がやや強い傾向にあることがわかるが，実習に対して抱いていたと考えられる不安は，実習を終了したという満足感や達成感によって軽減されたものと考える。

自己受容性について，宮沢[7]の中学生女子を対象に行った研究結果と比較してみると，4側面とも平均値は今回の調査結果の方が高くなっており，青年期の自己受容性は発達とともに次第に高まると報告されていることと一致する。実習前後での4側面ごとの平均値の比較からは，自己理解と自己信頼が実習後にやや低くなっており，

表2　自己受容性の4側面（mean±S.D.）

n = 36

	実習前	実習後	t 値
自己理解	24.19±2.56	24.03±2.78	0.886
自己承認	16.61±3.37	17.06±2.95	-1.339
自己価値	19.11±3.52	19.53±3.21	-1.474
自己信頼	19.68±3.26	19.37±3.24	0.661

* $\rho < 0.05$

表4　STAIと自己受容性の相関

n = 36

	実習前		実習後	
	状態不安	特性不安	状態不安	特性不安
自己理解	-0.220	-0.367 *	-0.109	-0.352 *
自己承認	-0.330 *	-0.591 *	-0.364 *	-0.537 *
自己価値	-0.347 *	-0.549 *	-0.381 *	-0.477 *
自己信頼	-0.379 *	-0.618 *	-0.208	-0.610 *

* $\rho < 0.05$

自己承認と自己価値では実習後にやや高くなっている。4側面間の相関について，宮沢の研究結果によると自己承認と自己価値との相関が高く，自己理解と自己承認との相関が低いとあった。さらに，自己理解と自己価値，自己承認と自己信頼，自己価値と自己信頼との各相関は，学年が進むにつれて低くなるとされている。今回の調査結果では，自己承認と自己価値との相関が高かったのは実習前後を通して，宮沢[8]の調査結果と一致しており，自己理解と自己価値，自己承認と自己信頼，自己価値と自己信頼との各相関についても，実習後には宮沢[9]の研究結果と同様の結果になっている。これは，宮沢[10]による「各調査時期におけるSAIの側面間の相関は，学年が進むに従って，それが低くなる。これは，自己受容性の4側面が学年が進むと次第に分化することを示すもの」ということから，実習を通して学生の自己受容性も次第に分化していることを示していると考えられる。学生は不安や緊張感を抱えながらも，実習を経験することで自分に対する理解や自信を深め，自己受容性を徐々に高めていると考えられる。

学生は母性看護学実習という初めての体験を目前に控え，さまざまな不安や緊張感を抱いていたことは実習前の状態不安が高かったという結果からうかがえる。また実習前後の特性不安の結果から，学生の性格特性として不安傾向がやや高い状態にあることがわかる。熊谷ら[11]は特性不安が過度に高い，または極端に低い場合は学習の成果に悪い影響を及ぼすと述べている。しかし，冨田ら[12]は，不安感情は看護者のあり方に対する自己洞察に有効に働いていると述べると同時に，学生には看護することの楽しさを感じ，実習に対する達成感がみられていたという調査結果を示している。これらのことから，やや不安傾向の高い状態にある学生でも，抱いていた不安を前向きに実習に活かそうとする姿勢につなげ，自己に対する理解や自信を徐々に獲得していく方向に作用させることができ，自己受容性を高める結果につながったと考えられる。

母性看護学実習は3週間という限られた期間の中で，妊娠期から産褥期及び新生児期までの対象者について，1週間ごとに関わっていく。また学生は短時間に自分自身のおかれる環境の変化だけでなく，対象者の身体的，精神的，社会的変化に対応しながら看護を展開していかなくてはならない。実習後には状態不安は有意に低下していたもののまだ高い状態にあったことは，実習期間中を通して適度な不安や緊張感を維持していたとも考えられ，自己受容性だけでなく，学習効果を高めることにもつながるのではないだろうか。適度な不安や緊張感を持った状態で，実際にさまざまな対象者と関わり看護を展開することによって得られた満足感が自己に対する自信につながると考えられる。

母性看護という学生自身が女性として自己と重なる部分の多い領域であることは，対象者の理解だけでなく，自らの母性性やライフサイクルを振り返り，母親をはじめとする家族との関係などについて改めて考えさせられる時間を持つことにもなる。このような時間を持つことも，自己受容性の変化に影響を及ぼしていると考えられる。

V まとめ

今回は母性看護学実習前後での学生の不安と自己受容性の変化とその関係について調査した。しかし，最初に述べたように，臨床実習は理論と実践との統合をはかり内面化する場である。臨床実習に臨む以前に，学生たちは机上での学習を進めている。従って，臨床実習での学びをより大きなものとするためには，机上での学習の段階から，学生の不安や緊張感，自己受容性を把握し，より効果的な学習指導ができるよう調査，研究を進めていくことが必要と考える。

引用文献

1）佐々木かほる，斉藤　基，中西陽子，正田美智子（1996）基礎看護実習における学生の不安についての研究．群馬県立医療短期大学紀要，3：19－24.
2）川原浩美（1989）臨床実習に伴なう看護学生の不安の認知とその対処．第20回日本看護学会集録，看護教育，218
3）梶田叡一（1990）自己意識の心理学．東京大学出版会，97－106.
4）中里克治，水口公信（1982）新しい不安尺度STAI日本版の作成．心身医学，22：108－112.
5）7）8）9）10）宮沢秀次（1987）女子中学生の自己受容性に関する縦断的研究．教育心理学研究，36（3）：67－72.
6）Spielberger C. D.（1970）日本版STAI．三京房，
11）熊谷智子，中村真理子，丹澤洋子，飯沢正美，堀江朝子，松木秀明（1996）実習前後の特性不安と状態不安の変動とその要因の検討．東海大学医療技術短期大学総合看護研究施設年報，6：60－64.
12）藤田美津子（1996）初めての臨床実習を前にした看護学生の不安．看護展望，21（3）：98－108.

Abstract

A study on anxiety and self - acceptance of students in the training of maternity nursing

Reiko KAMBAYASHI, Mika KANNO and Miharu NISHIWAKI

The purpose of this study was to clarify the relationship between anxiety and self-acceptance of nursing students. The relationship was investigated before and after the training of maternity nursing by the STAI and SAI. The results showed: 1) There was a statistically significant difference only in the state anxiety. 2) In the case of students with a high STAI score, a low self-acceptance was exhibited. 3) The self-acceptance of students was developed after the training of maternity nursing rather than before.